



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中國思想史に関する研究：思想史へのアプローチ
Author(s)	莫, 寒
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16971号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16971
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99815
Type	doctoral thesis
File Information	Han_Mo_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 莫 寒

主査 教授	近 藤 浩 之
審査委員 副査 准教授	吉 田 勉
副査 准教授	蔦 清 行

学位論文題名

中國思想史に關する研究——思想史へのアプローチ——

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では、「求真・述學・客觀・思辨」と概括する研究方法および方法論により、五つの思想的「争鳴」のその争点、具体的には、①「北辰」における天文家と儒家の認識と論争、②道家の「無爲而無不爲」における先秦から漢初まで思想の變遷、③『周易』坤卦初六の爻辭における文言傳の解釋と思想の成立、④『周易』の六十四卦の起源と四德説に關する朱子の考察、⑤『論語』「三省」に關する朱子の解釋および日本での受容などをめぐって、中國學術における思想的「争鳴」の實態を歸納的に考察して、中國思想史に關する（方法論による）檢證の一定の有効性を得ている。とりわけ以下の四點を、新しくユニークな觀點と方法によるものとして高く評價できる。

①「北辰」の解釋史において天文家の解釋と儒敎の解釋とが徐々に混ざり合った實態を示すとともに、天文家では唐代にすでに科學的な解釋が定着していたのに對し、儒敎では邢昺に至ってもなお北辰を正しく解釋できていなかったが、朱子は沈括の天文觀測の結果を用いて科學的な注解をつけ、朱子以降、北辰の正しい解釋も徐々に定着したことを明らかにした。

②道家の「爲す無くして爲さざる無し」（何もしないが何もかもしている）の解釋について、『莊子』知北遊篇の文脈をふまえて「爲も無く不爲も無し」（爲という概念がない）と讀み解く可能性を論證し、『老子』と『莊子』知北遊篇の成立における「無爲而無不爲」を檢討し、最初の「爲も無く不爲も無し」という消極的な思想から「爲す無くして爲さざる無し」という積極的な思想に解釋されるに至った過程を追究して明らかにした。

③儒家と道家との善不善觀・禍福觀を考察し、『韓非子』解老・喻老および『黄帝四經』雌雄節等の道家文獻では「積德」を解釋する際に「積不德」が招く惡果を戒める點が『易』文言傳と一致することを手がかりに文言傳の成立を再檢討し、出土資料と先行研究を踏まえ、文言傳における坤卦初六の爻辭の解釋が爻辭の「順」の意に基づいて『老子』「積德」思想を吸収し、解老・喻老・雌雄節等の解釋を参照して整理・修正した後に儒家的「積善」の言い方に置き換えたのだらうと説得力のある推論をした。

④『論語』の曾子三省章について、曾子の敎えおよび「三」の解釋をめぐり、朱注に對する批判として、すでに定説となっている伊藤仁齋と荻生徂徠の説を確認した上で、それに對して、懷德堂の五井蘭洲・中井竹山は、從來の朱子學の解釋には従わず、自ら朱子の眞義を探究し、荻生徂徠の説に反論していたことを明らかにした。さらに後來の學者たちが各々獨特な意見を述べていた、その諸説を檢證・整理しながら、江戸時代中後期における學術論争の實態を示し、日本における『論語』解釋史の思想的「争鳴」の一面を明らかにし、朱子の眞義を明らかにすることは難しいとしても、朱子が『荀子』勸學篇の「參省」を意識して曾子三省章を解釋する傾向があることを指摘した。

なお、第一章は『中國哲學』第50號（北海道大學中國哲學會、2023年）に、第二章は『中國哲學』第53號（北海道大學中國哲學會、2026年）に、第五章は『中國哲學』第52號（北海道大學中國哲學會、2025年）に掲載済みであり、すでに一定の評価を得ている。また、第三章は日本中國學會第77回大會（九州大學、2025年10月12日）において研究發表を行い、『日本中國學

會報』第78集に投稿中である。ほかの序章、第四章、終章は書き下ろしである。

・学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、序章にいう中國思想史に關する方法論（「求真・述學・客觀・思辨」など）の模索や檢證について、各章ごとにまた全體としてその方法論の有効性を確認する言及が望まれること、参考文献を個別に各章の注に示してはいるが参考文献一覧が完備されていないこと、全體の統一性に關する説明が不十分であるため個別の論文を集めたような印象を與えること、個別具體的な事例・実例の考察に片寄り中國思想史の全體を見通した方法論などの考察が少ないこと等の指摘がなされた。ただし、これらの問題點は、容易に修正し得るもの（すぐに修正すべき所）と、文獻や資料の制約でこれ以上致し方のないものがあり、むしろ今後の發展を期待でき、本論文の優れた成果と價值を本質的に損なうものではない。

以上に基づき本審査委員會は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評價し、全員一致で本論文が博士（文學）の學位を授與するにふさわしいものであるとの結論に達した。